

# 宗真寺の歴史



## 発刊にあたって

50年前、親鸞聖人700回大遠忌法要の高揚の中で、宗真寺  
仏教婦人会が生まれて45年、鐘楼が再建され除夜会を運営す  
る中で壮年会が誕生して10年がたちました。来年は親鸞聖人  
750回大遠忌の法要が本山で営まれます。

このような節目の年にあたり、宗真寺の歴史の小冊子(パ  
ンフレット)を作ることになりました。

宗真寺の前身の一向堂(草庵)が南條村に建てられてから、  
400年近い歳月が過ぎました。時代の流れの中での、お寺と  
門徒の姿を思い浮かべていただければ幸いです。

平成22年(2010年)4月

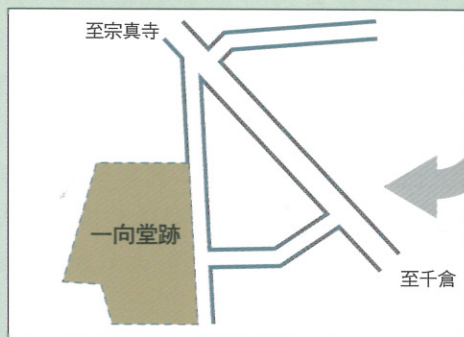
宗真寺仏教婦人会 会長 庄司 増子  
宗真寺仏教壮年会 会長 古畑 実



親鸞聖人700回大遠忌法要稚児行列

## 宗真寺の創建

宗真寺は宗祖親鸞聖人によって開かれた浄土真宗本願寺派の寺院で、本山は京都にある西本願寺です。宗真寺の前身は元和元年(1615年)の頃、門雪もんせつという僧が南條村に建てた「一向堂」という草庵に始まります。その場所は現在も字名「一向堂」として残っています。(現在の地番:館山市上真倉1808)



一向堂跡案内図

寛永2年(1625年)に館山の地を領した石川大隅守政次おおすみのかみまさつぐ(旗本4500石)は本願寺に深く帰依していましたので、陣屋近くの現在地を門雪に寄進、寺院を建立しました。宗真寺の山号は「石川山」ですが、個人の姓が山号につけられることは珍しいことで、宗真寺の創建に、この石川大隅守の果たした役割がいかに大きかったかが分かります。

石川大隅守の先祖、石川<sup>まさやす</sup>政康は蓮如上人と出会って、その教えに深く帰依して以来、蓮如上人と行動を共にしたり、一向宗(現在の浄土真宗)の寺院を建立して実子をこの寺院の開基にするなど、篤信の門徒でした。石川一族はそれ以来の真宗者で、政康の子も別の寺院を建立しています。

石川大隅守は館山に赴任する前は三河国に住していましたが、一向宗寺院の全く存在しない安房の地に赴くにあたり、是非一寺を建立して、お念仏の教えをこの地の民衆に伝えたいと願ったことでしょう。門雪が一向堂を建てて布教を始めた時期と重なります。宗真寺はこの二人の結びつきから始まったと言えます。

現在地に移った一向堂は宗真寺と改称、寛永9年(1632年)に本願寺の末寺として正式に登録されました。この年は徳川幕府が住民を掌握するために仏教諸宗本山に<sup>まつ じちよう</sup>末寺帖の作成を義務づけ、住民も又いづれかの寺院に属する<sup>てらうけ</sup>寺請制度を定めた年です。寛永末寺帖といい、宗真寺だけでなく多くの寺がこの年に正式に寺号を本山から下附されたのでした。この頃石川大隅守の次男、<sup>げん さつ</sup>玄察が第2世住職として継職しました。

なお、石川家の本家は<sup>するがのくに</sup>大隅守の孫のとき、元禄11年(1698年)に駿河国に赴任し館山を去りましたが、旗本屋敷は江戸末期まで神田に存在しました。



石川家の家紋、本堂卷障子の透し彫

## 門徒の先祖

一方徳川家康が江戸に国替えになった天正<sup>てんしょう</sup>18年(1590年)以降、経済の動きは関西から関東に流れ込み、急激な人口増加による食糧需要に応じるため、関西から多くの漁師が呼ばれて移住してきました。これらの関西漁民は好漁場に恵まれた安房地域をはじめ房総半島の各地に定住し、漁業は大いに発展しましたが、主役は紀州漁民で門徒衆といわれている人々です。

また、江戸への海路の玄関口であった館山の周辺では、<sup>せつ</sup>摂津国(現兵庫県)や和泉国(現大阪府)からの移住者が多く、物資の流通にあたる商人として活躍しました。

それらの人々が黒潮の流れに乗って、お念仏の教えを運んできたのです。宗真寺や房総地区の浄土真宗寺院の古くからの門徒に、紀州をはじめ関西出身の人たちが多いのは、こんな時代背景によるものです。そこへ徳川幕府の寺請制度が重なり、和田浦、千倉、白浜、富崎、西岬、館山湾沿いの各地区、船形、富浦に至るまで広く分布した門徒集団は宗真寺に所属することになりました。

宗真寺の草創期は、こうして僧侶と領主と民衆とがそれぞれの立場で浄土真宗の中心地からもたらしたお念仏によって支えられたのでした。



昭和20年代の境内

## 幕末から明治へ、火災からの復興

嘉永<sup>かえい</sup>5年(1852年)第14世無外住職<sup>むがい</sup>の時に本堂が焼失しました。火事は親鸞聖人報恩講の日の夜発生したと伝えられています。本堂内陣に現在も掛けられている親鸞聖人と蓮如上人の御真影<sup>ごしんえい</sup>2幅には「寛永11年願主釋門雪」という裏書きがあります。火災のとき誰かの懸命な働きで焼失を免れた、開基当時の貴重な宝物です。

このほかにも報恩講の時に掛けられる親鸞聖人の御絵伝<sup>ごえでん</sup>4幅も嘉永元年の年号が記されており、こちらも焼失を免れたことがわかります。第17世住職(現住職)継職の記念事業の一つとして、この4幅の御絵伝を修復しましたが、その時の専門家によれば、顔料の下地にすべて金泥を施す、当時の一流の技法で描かれた貴重な物で、保存もしっかりしているとの評価でした。これらは火災の難をのりこえて先人たちが残してくれた大切な財産です。



14世無外住職 (明治26年撮影)

火災から15年後の慶応<sup>けいおう</sup>3年(1867年)に本堂は再建、時はちょうど明治に変わるところでした。新しい本堂の正遷座<sup>しょうせんざ</sup>(御本尊を安置してつとめる法要)の折に新調した打敷の一部が残っており、それには「慶応四年戊辰晩春三月下旬」と記してあります。又、本堂透かし彫り欄間の裏(内陣側)には、明治33年、壇信徒の協力、尽力によって天井から石階(向拜の石段のことと思われる)に至るまでの修築が落成した旨、記してあり、14・15世住職の名が連記してあります。その時の総代、世話人の名もすべて欄間の裏書きに入っています。(※巻末の図版)



地震直後の救援活動は、比較的被害の少なかった白浜、富崎、西岬各地の門徒たちが幾日も手弁当で通って行いました。傾いた本堂の修理が一段落した後、昭和12年(1937年)、現在の客殿が完成しました。

しかし、その頃には日中戦争が始まり、やがて太平洋戦争へとつき進んでいきます。多くの門徒が戦死、川崎地区への爆撃、白浜の艦砲射撃などによる門徒の戦災死もありました。宗真寺の梵鐘をはじめ各家庭の金属仏具も強制的に供出させられました。戦争で失われたものはそれだけではありません。戦中戦後の苦しい生活の中で、伝統的な仏教行事、例えばおとりこしや地区の講などが維持できなくなり、消えてしまった地区も少なくありません。

昭和27年(1952年)、宗真寺は新しい法律(宗教法人法)にもとづき「宗教法人」になり寺則を制定しました。

昭和36年、親鸞聖人700回大遠忌が本山で修行され、新幹線のない長旅の本山まいりに、宗真寺から100人近い大参拝団が組まれたと聞きます。戦後の苦勞を乗り越えて、ほんの少し余裕が生まれた頃で、「一度は本山へ」という思いが果たされました。そんな高揚の中で昭和40年(1965年)宗真寺仏教婦人会が結成されました。本山から4年半おくれて宗真寺でも700回大遠忌だいおんきの法要がつとめられました。昭和41年(1966年)4月のことです。また、宗真寺を財政面で支える「護持会」も発足しました。



再建前の鐘楼石垣





本堂屋根棟飾りと16世无外住職（昭和49年）

昭和48年(1973年)から50年(1975年)にかけて本堂の大改修が行われました。震災後の応急処置から50年経ってようやく本格的に取りかかった无外住職念願の工事でした。屋根は寄せ棟の瓦葺きから、現在の入母屋千鳥破風銅板葺きに大きく形を変えました。南側と北側に回廊が設けられ窓も付いて本堂の中が明るくなりました。須弥壇、前卓、輪灯といった主な<sup>しょうこん</sup>荘嚴も新調されて、昭和52年(1977年)落慶法要がとまりました。ちょうど親鸞聖人誕生800年法要と重なりました。

平成4年(1992年)无外住職往生、90年の生涯は天災と時代の波とに翻弄されながら、ひたすら寺を守りつづけたものでした。困難な時期に住職となった第16世无外は、14世無外住職と似たような波瀾に満ちた生涯をおくりました。

## 新しい寺のあり方に向かって

さて、現住職第17世釋<sup>ゆうわ</sup>佑和の継職法要は平成7年(1995年)10月に行われ、その記念事業として鐘楼が再建されました。震災で失われた鐘楼と山門の礎石が片付けられず残されていたのは、いつの日か再建するという前住職の強い願いのあらわれで、その一つは実現することができました。3年がかりの事業が完成して平成10年(1998年)の大晦日、75年ぶりの除夜の鐘が鳴り響きました。

その除夜会の企画、準備、夜通しの行事の実行に取り組んでくれた門徒を中心に平成11年(1999年)宗真寺仏教壮年会が発足、女性中心の奉仕に支えられてきた寺院活動に、男性の新しい力が加わるようになりました。

宗真寺は館山市と南房総市という広い地域に唯一の浄土真宗のお寺です。400年近い歴史を通してずっとつながってきた深いご縁の門徒が沢山います。その上に日本の各地から新たにこの地に移り住んで来た門徒が加わって現在の宗真寺があります。

平成7年には共同墓の会「くえの会」が発足しました。「くえ」とは阿弥陀経の「<sup>くえいっしょ</sup>俱会一处」からの引用で、ともにひとところ<sup>くえいっしょ</sup>で会うというお浄土を表した言葉です。遺骨の納め場所を共有することで、今をつながり合って生きようという新しい「縁」の会です。核家族化、少子化の時代傾向に促されて、寺もまた新しいあり方を探り、心豊かに生きることの出来る社会の実現に貢献するための活動を続けていかねばなりません。



梵鐘撞き初め平成10年報恩講

間もなく親鸞聖人750回大遠忌を迎えます。生老病死という避けることの出来ない普遍の問題から逃げることなく、同時に私たちの生きる時代がかかえる様々な課題にも目を向けつつ、これからも共に歩んでいきたいものです。



▲報恩講のおつとめ



▲くえの会合同法要 秋のお彼岸



▲お念仏を子ども達へ相続 初参式

## <資料> 歷代住職

	法 名	往生年
開 基	釋門雪	延宝元年(1673)
第二世	釋玄察	承応3年(1654)
三	釋了圓	寛文10年(1670)
四	釋了察	元禄16年(1703)
五	釋患察	宝永7年(1710)
六	光暎院釋善察	享保16年(1731)
七	禎性院釋善瑞	天明6年(1786)
八	釋善味	宝暦9年(1759)
九	順性院釋善容	寛政12年(1800)
十	寶樹院釋了觀	文化元年(1804)
十一	慧明院釋龍運	文化14年(1817)
十二	善龍院釋成覚	弘化2年(1845)
十三	寶池院釋了誓	弘化3年(1846)
十四	無量院釋無外	明治33年(1900)
十五	功德院釋空外	明治44年(1911)
十六	究竟院釋无外	平成4年(1992)
十七	釋佑和	現 住 職



欄間の裏書き

維時明治三十有三年檀信徒之協力  
 盡心二依り天井乃至石階ニ至ル迄修築竣功  
 落成スル也

當山十四世 石川 无外  
 十五世 石川 空外

發願主 故 和田 善造

當 時 世 話 人

藤田 喜三郎	船形村
志村 龜吉	船形村
篠田 兼吉	船形村
和田 徳太郎	真浦
和田 岩次郎	白渚村
屋城 雄太郎	北三原村
志村 松太郎	千歳村
佐藤 庄平	千倉浦
木下 半三郎	平館村
新井 市三郎	忽戸村
安井 藤吉	布良村
吉田 弥三郎	布良村
天野 作右工門	相濱村
山田 久作	相濱村
松崎 長兵衛	相濱村



欄間の裏書き (当時世話人計46人)

當 時 世 話 人

白石	内川	内川	鈴木	杉田	井上	佐久間	干場	鈴木	石井	宮本	宇山	的場	的場	大野	寺沢	木村	佐野	酒井	丸山	加藤	佐藤	辰野	佐々木	手塚	浅井	島田	日下	櫻井	辰野	辰野
与惣右工門	与惣右工門	重右工門	伊助	重兵衛	勤十郎	半蔵	長九郎	庄吉	権四郎	源七郎	藤三郎	左五兵衛	吉次	治兵衛	安太郎	新五右衛門	佐次兵衛	清九郎	兼吉	市五郎	留五郎	惣兵衛	木豊吉	源吾	友吉	藤五郎	松五郎	八良右工門	治良吉	安五郎

香村	伊戸村	洲崎村	長渚	濱上渚	楠見浦	下町	根本村	相濱村	相濱村	川下浦	嶋崎村	大川村	大川村	平館村	千倉浦	和田浦	川名村	多田良村	川崎	川崎	北条	北条	笠名村	柏崎	沼崎	上町	下町	新井浦	新井浦	新井浦
----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	-----	-----	-----



欄間の裏書き

	當國館野村国分	當時惣代人	浅井佐太郎
彫師	後藤喜三郎	西川倭内	渡邊謙之助
橘	義信	佐右工門	中町
		中町	楠見浦

<あとがき>

宗真寺の歴史の小冊子を作るにあたり、編纂委員をお願いし、第1回の会議をもったのが平成21年8月初旬でした。委員の中に歴史に堪能な方がいたおかげで新しい発見もあり、10回の会議の中で何とか形になりました。不十分な内容とは思いますが、これを土台に今後の調査を待って、より充実した宗真寺の歴史を編纂していただきたいと思

合掌

平成22年4月 編纂委員責任者：天野久雄

<編纂委員>

石川 慶子 (住職)  
 石川 千帆 (副住職)  
 加藤 誠  
 庄司 増子  
 古畑 実  
 宮澤 公雄  
 吉永 賀美  
 吉永 悦子



宗真寺旧本堂(昭和45年頃)

浄土真宗本願寺派

# 宗真寺

千葉県館山市上真倉2124

宗真寺の歴史  
(2010年4月発行)